

## 逸話が伝える侘び茶の心

A Study of Stories about *Chanoyu* and Tea Masters

安田 保

YASUDA Tamotsu

During the late 15<sup>th</sup> and 16<sup>th</sup> centuries, tea masters began to appreciate the simple and subdued beauty of the Way of Tea also known as *Wabi-cha*. Many unique stories of *Wabi-cha* have been handed down to us. Whether the stories are fiction or not is not the question. The important matters are the receiving of the messages from the stories and to be able to feel the ideal spirit of *Wabi-cha*. This spirit can be understood as a guiding principle for our lives.

## 1. はじめに

茶の湯にまつわる逸話は数多く伝えられている。同じ内容の話が時代、人物、場所を変えて伝えられている場合や、歴史的に検証すると事実でないものも含まれる。しかし事実か否かは、逸話を楽しむ上でそれほど重要では無い。あの茶人ならそのように言ったであろう。そのような行動をとったであろうと感じさせてくれれば、逸話はその役目を果していると言える。重要なのは、逸話に込められた茶人からのメッセージを読み取り、その教えを如何に受け止めるかである。ここでは“美意識”と“主客の心”をテーマとした逸話を取り上げ、逸話とは何かを考察する。

## 2. 美意識

村田珠光(1423-1502)が祖とされる侘び茶は、武野紹鷗(1502-1555)を経て、千利休(1522-1591)により大成され、その後の日本人の美意識に大きな影響を与えるようになる。それまでの茶の湯は、唐物(舶来物)が珍重される華美なものであったが、侘び茶では精神性が重要視され作庭、建築、道具に自然美、不完全の美等の新しい価値観を求めるようになった。以下の逸話から侘び茶の美意識に触れることができる。

### 露地のしつらえ

ある茶人の朝の茶の湯に利休が参った時のこと、朝の風に吹かれ棕の落ち葉が散り積もり露地が山林のような風情になりました。利休はその様子を見て「何とも面白い風情であろう、しかし今日の亭主は巧者ではないので、きっと掃き捨ててしまうであろう」と言いました。案の定、後の席入りの時には、落ち葉は一枚もなく掃かれていました。利休がその時に言ったのには「露地の掃除は、朝の客ならば宵に掃き、昼ならば朝に掃き、その後は落ち葉の積もるに任せるのが心得たる者だ」と申されました。<sup>1</sup>

### 手水鉢の石

利休、手水鉢の前の捨石は、使用人に目を閉じさせ、ごろた石を何かに入れ、ガラリと捨てさせ、外に転び出た石だけを少し杖で直し、後はそのままにしておくのが良い。上手く置こうと思って捨てるのは良くないことであると申されました。<sup>2</sup>

上述の逸話は露地（茶庭）のしつらえは自然が基本であり、そこに人為的なものが見えることは良くないと言っているのだが、これには侘び茶人にとって露地、草庵（茶室）<sup>3</sup>とは何かを知っておく必要がある。禅僧が悟りを開く為に高山の寺に籠り修行三昧するように、茶人も悟りの境地に達するには、茶の修行に専念しなければいけない。しかし茶人は完全に遁世したのではなく、町衆としての生活もあったので、本来は山中にあるべき草庵を街中に構え、半僧半俗の生活をおくった。この草庵を“市中の山居”という。<sup>4</sup> それ故、露地は自然を写したものを良しとしたのである。

露地のしつらえを尋ねられた利休は、「榎の葉の もみちぬからにちり積もる 奥山寺の道のさひしさ」の古歌を引き教えたと言われる。<sup>5</sup>

豊臣秀吉(1536-1598)と利休が登場する逸話は多く残されているが、そこからは利休の美に対する厳しい姿勢を知ることができる。

### 朝顔の茶の湯

宗易の庭に朝顔の花が見事に咲いていると、太閤へ申し上げた者があった。されば見に行こうと朝の茶の湯に出向いたが、庭には一輪の朝顔も咲いていない。どうしたことかと不機嫌に思われた。さて、小座敷に入って見ると、色鮮やかな朝顔が一輪床に生けられてあ

った。太閤と共の者は目が覚める思いがして、宗易は大変なお褒めにあずかりました。これが世に「利休朝顔の茶の湯」と申し伝えております。<sup>6</sup>

#### 紅梅を生ける

春の頃、秀吉公、大きな金の鉢に水を入れ床に置き、傍らに紅梅一枝を置き、宗易に「花を生けよ」と命じました。近習の人々は「これは難題だ」と囁いていると、宗易は紅梅の枝を逆手に取ると、それを水鉢の中へさりとしごき入れました。開いた梅と蕾が混じり、水の上に浮かんだのが何とも言えない風情となりました。秀吉公は何とかして利休を困らせようとしても、何とも困らぬやつだと上々のご機嫌であった。<sup>7</sup>

いずれも利休と秀吉の葛藤を示す逸話である。絶対権力者である秀吉は茶の湯においても王となろうとしたのであろうか。しかし利休の茶は誰にも屈することはなかった。秀吉は利休に死を与えることによっても利休を超えることはできなかった。秀吉は生涯勝負に拘り続けたが、利休が到達した境地は勝ち負けや有無など二元的なものを超越した世界であったのであろう。「ある時、太閤、風炉の形を考えめぐね「こんな時は、利休を殺したことを不自由だ」と仰った」<sup>8</sup>とあるように、利休自害の後も、しばしば秀吉は利休のことを口にしたという。利休の死は秀吉の本意でなかったのかも知れない、また一時の怒りに任せたものだったのかも知れない。しかし秀吉が利休の大成した茶の湯、美意識を理解し、尊敬していたことは疑いないことである。

### 3. 主客の心

良い茶会とは亭主と客の心が通い合った茶会のことを言う。亭主は心を込めて客をもてなし、客はその気持ちを汲み取り感謝する。逸話が真の侘びのもてなしとは、心を通い合わせるとはどういうことかを教えてくれる。

#### 似非侘び茶人

守口という所に侘び茶人が住んでいた。利休とは知り合いで、そのうちお茶を差し上げますと約束を交わしていたので、ある冬に利休が大阪から京都へ向かう途中に、この侘び茶人を思い出し夜更けに訪れたところ、亭主は喜んで迎え入れてくれました。家も侘びた風情があり、嬉しく思っていると、窓に人の近づく音がしたので見てみると亭主が行灯と竹

竿を持ち出し、庭の柚の木の下に行灯を置き、竿で柚を二つほど取り内へと入りました。「これを料理の一品として出すのか、侘びのもてなしは面白い」と思っていると案のごとく柚味噌にしたためて出された。お酒も出たところで、大阪より届いたとふっくらとした肉餅（かまぼこ）が出された。利休はこれを見て「夕方に私の来訪を知らせる者があり、肴も整えてあったのに、始めは知らぬふりをしていたのか。わざとらしい」と興ざめし、まだ酒の途中であったが、京都に用事があると、亭主の引き止めるのも聞き入れず出発してしまった。侘び茶とは在り合わせで良いもので、似つかわしくない物は客には出さない方が良い。<sup>9</sup>

### 天下一の点前

宇治の茶商<sup>かんばやしちくあん</sup>上林竹庵<sup>10</sup>より茶会の招きがあり、利休は弟子を伴い訪れた。竹庵は利休が訪ねてくれたことを無常の喜びとして茶室へ案内した。懐石を運び出し、中立ちに至るまでは大過なく進行できたが、濃茶の点前になると、天下一の茶匠を迎えた緊張からか、竹庵の手もととはふるえ、茶杓が滑り落ちるやら、茶筌が倒れるやらで、さんざんな点前を披露することになってしまった。相伴の客は目で合図を交わし、腹の中での笑いの種にしていた。ところが茶が終わると、利休は「本日の点前は天下一である」と言って誉めた。茶会からの帰り道に弟子の一人が「あのような不手際の点前をどうして天下一と褒められたのですか」と問いました。そこで利休が言うには、「竹庵は点前を見せる為に我々を招いたのではない。ただ一服の茶を振舞おうと思って招いたのである。ただ湯がたぎっている間に一服の茶を点てようと思って、怪我、あやまちを顧みないで一心に茶を点ててもてなしてくれたではないか。その心に感じ入ったからこそ賞賛したわけである。」と申された。

11

守口の茶人は悪意があったわけではないが、侘びのもてなしを期待していた利休の心に叶わなかった。竹庵は美味しいお茶を差し上げたい一心でもてなした結果、利休の心に叶ったのである。この二つの逸話は対照的な話であるが、ともに茶の心を学ぶことができる。利休道歌<sup>12</sup>にも「茶はさびて心はあつくもてなせよ 道具はいつも<sup>ありあわせ</sup>有合せにせよ」<sup>13</sup>とある。利休は「客と亭主のお互いの心の持ちようはどのように心得ておくべきか」と問われた時に、次のように応えた。

いかにもお互いの心に叶うのがよい。しかし、だからといって叶いたがるのは悪い。茶の湯の道を十分に修得した客と亭主ならば自然と気持ちのよいものである。未熟の人が互いに相手に叶おうとすれば、一方が茶の湯の道に外れると一緒に誤った方向へ行ってしまふ。さればこそ、自然と心に叶うのはよいが、意識して叶いたがるのはよくない。<sup>14</sup>

利休の応えに多くの説明は必要ないであろう。しかし利休はただ相手の気持ちに合わせようとするなど説いているのではない。「修得した客と亭主」とあるように、無理に相手に叶おうとしなくても自然と相手の気持ちを汲み取れる茶人になるように修行をしないといけないのである。もう一つ客と亭主の逸話を紹介する。

#### 雪中の香炉

ある年の雪の暁に利休はよしや葎屋町の宅から蓑笠を着てやぶのうちしょうち藪内紹知<sup>15</sup>を訪ねた。露地に入り、蓑笠を脱いでいると紹知が迎えに出てきた。利休は火の入っている千鳥の香炉を右袖から出して紹知に渡すと、紹知は左手で受け取りながら、「私も懐に香炉があります」と利休に渡した。利休ははなはだ興を感じられた。<sup>16</sup>

なんとも心が温くなる逸話である。利休は寒い中を出迎えてくれる老茶人のことを気遣い温めた香炉を持参する。紹知は道中冷えきった利休の身体を気遣い香炉を用意する。雪景色の中で香炉を取り交わす二人の姿が目につかぬ。客と亭主はこのような間柄でありたいものである。

#### 4. 逸話の演出

上述の逸話からも分かるように、逸話は平易な言葉を用い、面白おかしく書かれている。これはより多くの人に教えを伝えることを目的としている為だと考えられる。

「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる」<sup>17</sup>とイエスが語ったように、聖書でもしばしばたとえ話が用いられる。茶の湯の逸話と聖書のたとえには共通して、印象的で解り易い話が用いられている。物語の一場面が鮮やかに脳裏に浮かび、視覚に訴えてくる演出。これはキリスト教が教会のステンドグラスを用いて教えを説いたことや、寺社仏閣に伝わる縁起絵巻と同じ効果を持つのではないだろうか。

また、茶の湯の逸話と聖書のたとえのパターンの一つとして、弟子または共の者が、間

違った行為を行ったり、愚問を繰り返したりする場面がある。「なぜあのようなことを言われたのですか」、「たとえの意味を教えてください。」の類の質問である。私は常々、それくらいのことは自分で考えれば分かりそうなものなのに、何と愚かな弟子であろうと置いていたのだが、これは作者の意図ではないかということに気付いた。読者は愚行、愚問を繰り返す弟子に対して優越感を感じ、自分ならこのような過ちは犯さないと心に刻むのである。

愚か者は実は名脇役であり、再確認しておく必要がある重要なポイントを読者になりかわり質問しているのである。これに似た光景に茶室で遭遇することがある。茶会ではその日のメインゲストである正客が代表して亭主と会話をするが、正客は総じて茶の湯に精通しているが、巧者ぶらず、相伴の客の為に亭主に教を請う。「お床の掛け物を読み下していただけますか」と尋ねたり、道具の由来を聞くことにより、その日の趣向を解き、空間を共有する者と一座建立を為すのである。

## 5. 最後に

茶の逸話を伝える茶書には『長闇堂記』<sup>18</sup>、『南方録』<sup>19</sup>、『江岑夏書』<sup>20</sup>、『茶人行言録』<sup>21</sup>、『茶窓閑話』<sup>22</sup>などがある。その中でも『茶話指月集』は、千利休の言動を直接に見聞きしていた利休の孫千宗旦(1578-1658)<sup>23</sup>が、折にふれて話していた内容を書き留めた茶の湯のエピソード集である。宗旦四天王<sup>24</sup>の一人藤村庸軒(1613-1699)<sup>25</sup>の茶話を、門人で女婿の久須美疎安(1636-1728)<sup>26</sup>が筆録、編纂したもので、庸軒没後2年目の元禄14年(1701)に刊行された。<sup>27</sup> 書名の由来は下記の通りである。

茶は本来禅によるので、特別に言うべきことはないが、ただ私(宗旦)が常々語っている古人の茶話を指月とすれば、自ずと得ることもあるだろう。藤原定家が「和歌に師匠無し、ただ旧歌を以て師となす」と言ったのも道は違えど道理は同じである。<sup>28</sup>

指月とは指針である。それは場所、時代が変わると逸話、経文、聖書のたとえ等違った形で表現されるが、どれも手法の一つに過ぎない。師(神仏)はただ月を指差しただけであり、弟子は指された先にある月を見ようと試みる。月即ち月に秘められた真意を得ようと修行を重ねるのである。そして悟りの境地に達した者にとって指月は不要なものとなる。利休道歌にある「習ひをば ちりあくたぞと思へかし 書物は反古、腰張にせよ」<sup>29</sup>の教

えであり、禅にいう「教外別伝・不立文字」である。

そして月の真意とは、本来すべての人間にそなわっている清浄な悟りの智慧であり、普遍的な心理である。この悟りを得た者は、月が夜の闇を照らすように、世の闇を照らす師となるのである。

## 註

- 1 林屋辰三郎・横井清・榎林忠男編注『日本の茶書 2』「茶話指月集」平凡社 1972、pp.14,15 より引用。本論文における現代語訳は谷端昭夫著『茶話指月集を読む』淡交社 2003、井口海仙著『茶人のことば』淡交社 1998、筒井紘一著『茶人の逸話』淡交社 1984 を参考とする。
- 2 同上 p.16
- 3 「茶室」という呼称は江戸時代には殆ど見られず、近代になってからのもの。それ以前は「数寄座敷」、「茶湯座敷」、「茶屋」、「囲(かこひ)」、「小座敷」、「数寄屋」などの語が見られる。林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、2002、p877
- 4 林屋『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、p.605
- 5 林屋・横井・榎林『日本の茶書 2』「茶話指月集」 p.21
- 6 同上 p.25
- 7 同上 p.19
- 8 同上 p.41
- 9 同上 pp.16,17
- 10 近世の宇治茶師の一家。上林家の庶流。林屋『角川茶道大事典』 p.340
- 11 筒井『茶人の逸話』 pp.22,23
- 12 利休教歌 利休による茶道教歌を集めたと伝えるもの。『茶道教論百首歌』、『茶湯百首歌』等がある。林屋『角川茶道大事典』(普及版)、p.1425
- 13 井口『茶人のことば』
- 14 熊倉功夫著『南方録を読む』淡交社、1983、p.21
- 15 茶道の一流派藪内流の一世。道号は剣仲。林屋『角川茶道大事典』(普及版)、p.1369
- 16 谷端『茶話指月集を読む』 p.191
- 17 新約聖書マタイによる福音書 13. 34-35 より。『聖書』日本聖書協会、1987
- 18 長閑堂久保利世の随筆。寛永十七年(1640)の成立。林屋『角川茶道大事典』(普及版)、p.920
- 19 著者は堺南宗寺集雲庵の僧南坊宗啓とされるが、実は確認できず、現在の研究段階では、『南方録』なんぽうろく原本の発見者を称する福岡藩家中立花実山によって編集、成立したと見られる。同上 p.1049
- 20 表千家第四代逢源斎江岑宗左(1613-1672)の筆録。父宗旦よりの聞書を中心に利休以来の茶のすべてを語ったもので、五代随流斎宗左ずいりゅうさいそうさの為に書き留めたが、千家流茶道の貴重な史料である。同上 p.466
- 21 藪内竹心による逸話集。同上 p.883
- 22 尾張藩士近松茂矩著。文化元年(1804)刊行。同上 p.887

---

23 千家第三世。父は千家二世の少庵、母は利休の娘亀。同上 p.753

24 宗旦の門人を代表する茶人の総称。山田宗偏、藤村庸軒、杉木普齋ふさいの三人に加えて、三宅亡羊ぼうよう、久須見疎安、松尾宗二の中の一人が入り四天王と称している。同上 p.773

25 同上 p.1182

26 同上 p.411

27 谷端『茶話指月集を読む』淡交社、2003 p.2

28 同上 p.11

29 井口『茶人のことば』